



Data

企画・製作・監督：若松孝二
 出演：井浦新（ARATA）／満島真之介／岩間天嗣／永岡佑／鈴之助／洪川清彦／大西信満／地曳豪／中泉英雄／小倉一郎／篠原勝之／吉澤健／寺島しのぶ

👁️👁️ みどころ

三島由紀夫は何を目指して割腹自殺をしたの？それは憲法改正と自衛隊の国軍化だが、本当は死に場所を見つけたかっただけ・・・？

『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程（みち）』（07年）の若松孝二監督が、三島事件を取りあげたのはなぜ？それは世の中を変えたいと思ひ行動する若者の心情を表現したかっただけだが、「内向き志向」が強い今ドキの若者たちは両作をどう観る？井浦新は『キャタピラー』（10年）の寺島しのぶと同じような熱演だが、本物の三島由紀夫に比べると少し端整すぎる感も・・・？

それはともかく、何も決められない民主主義にあえぐ今の日本国を見てみると、結局何も変えられない・・・？



■□■あの日、日本は？あの日、私は？■□■

1970年の日本は一方では学生運動の高揚によって「政治闘争の季節」に入るとともに、高度経済成長政策が調整に進む中、大阪万博が大きな盛り上がりを見せた。1967年4月に大阪大学法学部に入学した私はすぐに学生運動に飛び込み、ベトナム戦争反対、安保改訂反対を2大テーマとする忙しい活動の毎日を過ごしていた。1968年12月には比較的紛争が穏やかだった大阪大学でも全共闘系学生による全学封鎖が実施され（1969年11月まで）、授業がなくなる中、私は1968年10月には東大紛争支援の活動に参加し、東京大学にも赴いた。しかし、自分が参加している活動にさまざまな疑問が生じるとともに、三派全学連や東大全共闘を中心とした1968年の10・21国際反戦デーにおける新宿騒乱、翌1969年1月の安田講堂事件、同年10・21の暴動、同年11月の佐藤首相訪米阻止闘争をながめる中で、自分の道を司法試験に決めた。そして197

0年1月26日の21歳の誕生日に我妻榮『債権総論』を購入し、1人孤独な勉強を開始した。1970年4月、4年生になった私は大学では民事訴訟法の授業とゼミに出席するだけで、後はアパートで1人の勉強を続けていたから、すぐ近くの千里丘陵で大阪万博が盛大に開催されていることも全く他人事だった。

そんな中、たまたま大学に行った時に聞いたニュースが、1970年11月25日の三島由紀夫割腹自殺事件だ。連合赤軍による浅間山荘事件は1972年2月だが、1970年3月には赤軍派による「よど号ハイジャック事件」が発生していた。あの日、日本はそんな状態だった。そしてあの日、私は孤独な司法試験勉強に明け暮れていた。



(C) 若松プロダクション

■三島文学の理解は？三島の「人格」の理解は？■

三島由紀夫の小説は『潮騒』や『金閣寺』は読んでいたものの、どちらかという右翼系のもの(?)より五木寛之の『内灘夫人』など左がかった(?)方が好きだった私は、『憂国』も読んでいなかった。しかし、2006年4月3日に映画『憂国』(65年)を観て、なるほどこういう物語だったのかと納得(『シネマルーム10』304頁参照)。また、三島由紀夫割腹自殺の報を聞いて、さっそく受験勉強の合間をぬって『豊饒の海』4部作を購入したが、こりゃかなり難解!行定勲監督の『春の雪』(05年)では、侯爵家の若き嫡子・松枝清頭と伯爵家の美しき令嬢・綾倉聡子との純愛が、「これぞ、元祖国産純愛モノ」というスタイルで描かれていたが、そこで私は「三島由紀夫が描く『至高の愛』が、貴族のお坊ちゃんのおがままのように思えたのは、ひょっとして私が年をとったせい・・・?」と書いてしまった(『シネマルーム9』356頁参照)。

このように、私の三島文学についての理解も三島由紀夫の人格についての理解もレベル

は低かったが、それは大方の日本人も同じはず。しかし本作を観れば、あくまで若松孝二監督の目を通してであり、井浦新の演技を通してではあるものの、かなりの程度三島文学や三島由紀夫の人格に迫っていくことができる。ここで詳しくそれを論じる気はないが、さて、あなたの三島文学の理解は？また三島の「人格」の理解は？



(C) 若松プロダクション

■□■若松監督はなぜ今、三島事件を？■□■

6月17日(日)に放送された『たかじんのそこまで言って委員会』は、一方で元オウム真理教の幹部で今は「ひかりの輪」代表となっている上祐史浩を、他方で本作の若松孝二監督をゲストとして招いた。上祐史浩に対しては、平田信、菊地直子、高橋克也の相次ぐ逮捕によってオウム事件で指名手配されていた犯人がすべて捕まった今、あらためて「あの時」の「あの事件」をどこまで知っているのか？その反省は？等々の質問が飛んだが、若松監督に対しては専ら、三島由紀夫がなぜあの事件を起こしたのかという質問に終始した。自衛隊にクーデターを訴えても本当に自衛隊が動くとは思っていなかったであろう、との認識はパネラーも若松監督も一致していたが、三島が本当に目指したのは何だったのか？については、自分の死に場所を捜しただけなのでは？という意見と、いやホントに憲法改正と自衛隊の国軍化を目指していたはずだという両説に分かれた。

『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程(みち)』(07年)、『シネマルーム18』56頁参照)を監督した若松監督は左翼系思想の持ち主と思われがち。しかし、彼自身の説明によれば「自分は右翼でも左翼でもなく中立。ただ、あの当時の世の中を変えたいと思い行動する若者たちの心情を表現したかった」だけらしい。しかして今、本作で彼が表現したかった三島由紀夫事件とは？

1970年当時から大きく劣化が進み、「何も決められない民主主義」がまかり通っている昨今、あらためて1970年に起きたあのショッキングな事件の意義や限界を考えてみる必要があるのでは？

■□井浦新の役への没入は、『キャタピラー』の寺島しのぶ？■□

1965年頃からライフワークとして『豊饒の海』を書き始めた三島はノーベル文学賞候補にまでなっていたが、他方で①自衛隊への体験入隊②民族派グループとの親交そして③楯の会の結成、と進んでいったことは当時の私もよく知っていた。三島はなぜそんな行動を？また、三島は30歳を境にジム通いを始め、以降45歳で没するまでの間にボディビル、ボクシング、空手、剣道、居合抜き、水泳、乗馬などで鍛え、剣道5段、空手初段となった。これは若い頃にひ弱な天才と見られていたことへの反発と反省からだが、そんな鍛錬＝肉体改造の中で三島が目指したものは？



©若松プロダクション

本作では三島の妻・平岡瑤子を演ずる寺島しのぶは出番も少なく存在感も薄いのが、『キャタピラー』（10年）で見た寺島しのぶはベルリン国際映画祭での銀熊賞（最優秀女優賞）の受賞も当然と思えるすごい演技で、まさに役に没入していた（『シネマルーム25』215頁参照）。井浦新は本作への主演を機に「三島さんを演じた役者の名前が、アルファベット表記でエンドロールに出ることは好ましくない」と述べて、ARATAから井浦新に変えたが、本作にみる彼の三島への没入ぶりもすごい。とりわけ、クライマックスとなる陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地内東部方面総監部総監室の2階バルコニーでの絶叫演説は見モノ。もっとも、私が写真で知っている三島はたしかにハンサムだが、かなり面長で野性味タップリの顔立ちだから、端正とは思えない。しかし、井浦はもともとファッションモデルを

していたぐらいだから、全体的にカッコよく端整。現在放映中のNHK大河ドラマ『平清盛』では松山ケンイチが野性味タップリな清盛を熱演しているが、彼は『ノルウェイの森』（10年）ではハンサム系もバッチリと決めていた。井浦は1974年生まれだから本作で描いた三島の年齢と大きくは違わないが、ハンサムすぎるから年齢的にも少し若く見えてしまう。したがって、役への没入は『キャタピラー』の寺島しのぶと同じだが、本物の三島由紀夫に比べると少し端整すぎる感も・・・？

■□■結局、何も変わらないことは明らかだが・・・■□■

私は読売新聞が毎週土曜日に連載している「昭和時代」を愛読しているが、その「第2部」の平成24年3月24日版には「べ平連・全共闘」「中国の文革」と並んで、「三島由紀夫」が取りあげられた。そこでは、まず「最後の小説に心血を注ぐ一方で三島は、戦後民主主義と経済的繁栄によって、日本人が本来持っていたところを失っていくことの空虚にいらだっていた。」と分析した。それに続いて、三島は『果たし得ていない約束 私のの中の二十五年』と題する随筆で<このまま行ったら「日本」はなくなって（中略）その代わりに、無機質な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残るのであろう>と『戦後』を振り返り、日本の未来を予言した」と指摘した。その見出しは『戦後』に「いらだち」だが、本作を観ていると全共闘運動が高揚してくる中、再三自衛隊の治安出動を求めるもそれが実現せず、「日本」がなくなっていくことに「いらだち」を高めていく三島の姿がよくわかる。

三島事件が起きた1970年は大阪万博が開催された年だが、それから40年後の2010年には上海万博が開催された。上海万博の入場者数が大阪万博のそれを上回ったことに私は特別の価値を認めないが、三島事件から40年を経た今、日本の劣化と中国の巨大化は著しい。そして2012年6月21日の今、消費増税法案はすったもんだの挙げ句、民自公3党の共同提案によって成立する見込みとなったが、これに反対する小沢グループの造反、民主党の分裂、新党結成の可能性もある。衆参両院の「ねじれ」の中、まさに政治機能の不全、民主主義の形骸化は明らかだ。そんな中、私は「何も決められない民主主義」にいらだちを持ち続けているが、きっとそれは三島が1970年に持っていた「戦後にいらだち」と同じ根のものだ。そうすると、前述の三島流の言葉を今の私なりに言い換えれば、「このまま行ったら『日本』はなくなって」までは全く同じ。そして（中略）後の結論は、「事実上主権を失い、中華人民共和国の自治領となった、権力に従順な働き者の国が極東の一角に残るのであろう」ということになる。もちろん、三島の前述の言葉は自分の生命を賭けた重いものであるのに対し、私のこの文章はシニカルに評論しているだけという大きな違いがあるが、本作をじっくり鑑賞した今、67年間も平和と民主主義を維持し経済的に繁栄してきた希有な国の、「何も決められない民主主義」へのいらだちは頂点に達している。もっとも三島が三島事件を引き起こしても日本は何も変わらなかったように、私1人がいくらこんな戯れ言を書いても、結局何も変わらないことは明らかだが・・・。

2012（平成24）年6月21日記